

第4回鳴く虫がつなぐ桂川流域生態系ネットワーク協議会 議事要旨

■開催日時、場所

開催日時：2025年11月6日（木）10:00～11:50

開催場所：京都テルサ 東館2階 第1・2セミナー室

■議事次第

1. 開会
2. 挨拶
3. 出席者紹介
4. 議事
 - ①鳴く虫がつなぐ桂川流域生態系ネットワークの取組状況について
 - ②今後の進め方について
5. 閉会

■出席者（敬称略）

（委員）

- 鎌田 磨人（徳島大学 大学院社会産業理工学研究部（理工学域）教授）◆会長
坂本 昇（伊丹市昆虫館 館長）
丹羽 英之（京都先端科学大学 バイオ環境学部 教授）
深町 加津枝（京都大学 大学院地球環境学堂 准教授）◆副会長
八木 剛（兵庫県立人と自然の博物館 事業推進部長）
奥野 真章（※代理：京都府 建設交通部 理事）
平山 周作（農林水産省 近畿農政局 農村振興部長）
榎本 和久（環境省 近畿地方環境事務所 統括自然保護企画官）※Web参加
小口 陽介（環境省 自然環境局 京都御苑管理事務所長）
西澤 洋行（国土交通省 近畿地方整備局 淀川河川事務所長）
平野 雅章（一般社団法人自然環境文化推進機構 代表理事代行 兼 理事 兼 事務局長）
杉本 圭哉（きょうと生物多様性センター 事務局長）
南 隆博（※代理：公益社団法人京都市観光協会 担当部長）
泉 真吾（※代理：株式会社京都銀行 営業本部 法人総合コンサルティング部 観光・地域活性化グループ長）
影山 伸幸（京都信用金庫 総合企画部 部長）※Web参加
平岡 聰（京都中央信用金庫 理事 兼 地域創生部 部長）

（事務局）

国土交通省 近畿地方整備局 淀川河川事務所

公益財団法人日本生態系協会

■配布資料

議事次第

出席者名簿

配席表

鳴く虫がつなぐ桂川流域生態系ネットワーク協議会 規約

資料1 鳴く虫がつなぐ桂川流域生態系ネットワークの取組状況

資料2 今後の進め方

参考資料1 第3回鳴く虫がつなぐ桂川流域生態系ネットワーク協議会 議事要旨

参考資料2 きょうと生物多様性センター ニュースレター3号

【議事内容】

■淀川河川事務所 挨拶

- ・西澤所長より挨拶。

■出席者紹介

- ・事務局より規約の名簿の更新、委員の追加について説明。

■議事①：鳴く虫がつなぐ桂川流域生態系ネットワークの取組状況について

- ・事務局より資料1について説明。

会長　　日新電機株式会社が整備された雨庭や、自然共生サイトに認定されている株式会社島津製作所の企業緑地で、多くの鳴く虫が確認されたことは、企業の価値創造につながる。自然共生サイトの指標として、鳴く虫はわかりやすいと思う。現在作成中の「鳴く虫の生息に適した草地の管理・創出の手引き」は、ドラフトでもよいので、興味・関心を持つ企業に配布できるとよい。金融機関など、情報発信に協力してくれる主体と連携して広めていけるとよい。

委員　　企業緑地で実施される、社員の家族や、地域の方々を招いたイベントにおいて、地域の方々や子どもたちに、鳴く虫を含めた昆虫に親しんでもらう機会があるとよい。

会長　　市民参加型の取組の結果を示した地図は、非常に興味深い。主に河川沿いで記録されている種もあり、河川沿いの草地が重要と思う。国土交通省が管理する河川敷の草地をコアエリアとして、どのように周辺へ広げていくかは、この協議会のミッションそのものであり、皆で考えていくとよい。

委員　　第4回地域・人づくりワーキングで、京都府・京都市から、都市公園を重要な公共空間の場として、公園の利用や管理を前向きに考えたいとの意見があった。その観点からも現状把握ができるとよい。

- 委 員 河川敷や公園、企業緑地などでの取組以外に、農地での取組も次の展開としてあってもよいと思う。
- 委 員 農林水産省では、多面的機能支払交付金制度を進めており、その中で環境配慮にも取り組んでいる。桂川沿いや京都市内でも取り組まれており、そのような場を通じて、農業者の関心を高められる可能性はあると思う。
- 委 員 桂川・嵐山地区の地域の方々との意見交換会では、観光客向けというよりかは、地域住民が参加できる機会を提供することが大事であるとの意見があつた。地域住民に還元でき、喜ばれる企画ができるとよい。また、学校の授業などにも鳴く虫の視点を盛り込むなどの展開と一緒に考えていけるとよい。
- 委 員 伊丹市の事業では、地元の方々に自分の地域を再発見してもらうことを目指して取組を進めている。桂川・嵐山地区のファミリー層にも鳴く虫を楽しんでいただけるようにするとよい。
- 委 員 金融機関は地域にとって非常に重要な柱と思う。今後どのような形で企業と連携できそうか、お聞きしたい。
- 委 員 金融機関として、企業と連携していくことは、どのように巻き込んでいけばよいかわからず、難しさを感じている。
- 委 員 裾野の拡大や関係人口の増加という観点では、当金庫の職員に対する環境教育のような取組も考えられる。また、今年きょうと生物多様性センター等と締結した「きょうと生物多様性パートナーシップ協定」による連携も活かし、生物多様性の保全に向けた取組の一環として貢献できる場面もあるのではないかと考えている。
- 委 員 現状は、広報での協力しかできていない。今後は、窓口での広報やイベント参加のような形で積極的に関与していきたい。
- 会 長 金融機関は、企業との直接な対話だけでなく、受付や待合スペースにポスターを掲示するなど、地域の方々との接点として協力してもらえると、取組がさらに広がると思う。
- 事務局 金融機関との連携は、受付や待合スペースで取組をご紹介いただく他にも、例えば、地域の学校で金融教育を実施する際に自然や環境保全の内容も盛り込むことや、環境保全型の農産物の販路拡大を行うことなどがあげられる。
- 会 長 京都には、多くの企業が参加している特定非営利活動法人KES環境機構があ

る。参加企業に活動してもらえると、取組の広がりにつながると思う。KES環境機構にも情報提供できるとよい。

■議事②：今後の進め方について

- ・事務局より資料2について説明。

委 員 事務局から説明があった企業緑地での鳴く虫の調査とは別に、日新電機株式会社と三菱自動車工業株式会社の近隣の街区で鳴く虫の調査を行った。調査地内の公園には、多種の鳴く虫が生息しているところと、そうでないところがあり、管理が粗放な方が多いと推察された。そのため、公園での草地の管理を工夫すれば、鳴く虫が増加すると思われる。また、企業緑地は、面積が広いこともあるが、多くの種が確認され、街中の緑地として貢献している。小学校、社寺は、個人宅よりも種数が多かった。農地は、集約的に管理されていて、種数は少なったが、個人宅とは異なる種組成であった。個人宅は、さまざまな場所で見られる種しかいなかつた。また、桂川の支川であり、京都府が管理している有栖川は、ネットワークの回廊になっている。

会 長 鳴く虫の調査結果などの科学的根拠を共有しながら取組を広げていけるとよい。京都には多くの大学が存在し、今後の取組において、大学との連携も重要と思う。

委 員 京都市全域で取組を進めることは難しいので、モデル地区を設定し、緑地の状況といった自然環境の面と、銀行や学校、企業などのネットワークに参加してもらえるとよい拠点の位置といった社会環境の面をあわせて整理して、地図化できるとよい。

会 長 モデル地区を決めて、深く掘り下げて検討できるとよい。次回のワーキングでは、モデル地区を設定するとともに、自然の質や人々の結びつきをどのように浮かび上がらせていくかを検討できるとよい。

委 員 地域・人づくりの取組では、地域の団体の方々と意見交換する機会はあったが、今後はよりオープンなワークショップやシンポジウム等を開催し、次の展開につなげるために、この取組を地域の方々に知ってもらい、関心を持つてもらえるようにすることが重要と思う。

会 長 今後の発展は、生態系ネットワークの取組を推進するプラットフォームの具体的な姿を明確にしなければ難しいと思うので、検討いただきたい。取組に关心のある企業が参画できる枠組みや、KES環境機構のような他のプラットフォームとの連携を考えていくことが必要である。また、インストラクター

やガイドを育成する仕組みが必要と思う。インストラクターやガイドの育成にあたっては、きょうと生物多様性センターとの連携が重要である。大学の市民講座などで、一定のスキルを持ったインストラクターを育成することも考えられる。また、「鳴く虫の生息に適した草地の管理・創出の手引き」と「鳴く虫を素材としたガイドツアー実施のためのテキスト」を活用していくことが必要である。

- 委 員 河川管理においては、草を刈って欲しいとの要望も大きい。予算にも限りがあり、可能な範囲で対応しているが、対応できずに草が残っている場所が、結果的によい環境になっている。生態系が豊かなことに価値を見出す人を増やしていくことが重要と思う。小中学生も対象として、取組を進めていけるとよい。
- 委 員 環境省が所管している京都御苑は、自然的な側面とともに文化的な側面も持っている。京都御苑でも連携・発信を図り、多くの方々に興味・関心を持っていただきながら、活動を進めていけるとよい。
- 委 員 協議会としての取組をさらに展開させる場合は、資金や人材を増やして、体制を整備しないと難しいのではないかと思う。
- 委 員 生物多様性の4つの危機の一つに、人の関わりの低下が指摘されている。生物多様性の保全の取組に関わる人材や担い手の育成は、大きな課題であると考えている。今後も、本協議会と連携を図りながら取組を進めていきたい。
- 委 員 今後の展開で、どのように人を巻き込んでいくか、また、どのように多様な人を巻き込めるかによって、取組のデザインが変わってくると思う。かつて兵庫県立人と自然の博物館で実施されていた「鳴く虫インストラクター養成講座」の教材を提供することは可能である。
- 委 員 カネタタキやツヅレサセコオロギなど、住宅地の庭先やマンションの植え込みにもくらす種もいる。この取組が、そうした身近な自然に気づき、さまざまな虫に興味を持つてもらえる展開になるとよい。
- 委 員 ガイドツアーの実施や外国人旅行者への対応の検討について、お力添えできることがあれば協力したい。京都には、歴史や文化に関心を持って訪れる旅行者が多いので、テキストには文化的な面も記載されているとよい。
- 会 長 大きな産業となっているポケモンを生み出した人は昆虫少年であった。リアルな世界で虫を追いかけてきたリアリティーが、子どもたちの共感を生んだと思う。一方で、ゲームばかりしている子どもたちが、リアリティーを生み

出すことは難しいと思う。鳴く虫をきっかけとして、さまざまな主体を巻き込みながら、新たな価値の創造につながる活動として広がっていくことを期待している。

以上